映画をもっと深く楽しむために

映画の國
エイガノクニ

¥0 TAKE FREE!

Dec.2008 n.02

CONTENTS

- クロード・シャブロル、スリラーの語り部を装った鋭利な人間観察者
  - シャブロルのノワール（論）（吉田広明）
- グリフィスの遺したもの
- 『若い娘』を取り巻く様々な才能（細川晋）

［連載］
- ☆世界映画探訪（ドクトルX.）
- ☆映画祭ディレクターの映画祭りな日々（矢田部吉彦）
- ☆映画の中のジャズ、ジャズの中の映画（上島春彦）
- ☆映画と本の話（遠山純生）
- ☆映画人が選ぶ映画史上の傑作 〜 第二回：クロード・シャブロル 〜

序 フランス映画の"悪意の眼"

『肉屋』ジャン・ヤンヌ（左）とステファーヌ・オードラン ©BRINTER

クロード・シャブロル、スリラーの語り部を装った鋭利な人間観察者

今年の十二月から、三ヶ月連続でクロード・シャブロル作品のDVDがリリースされる。その三本『肉屋』『不貞の女』『女鹿』は、シャブロル中期の最も脂の乗った時期に撮られた傑作群。

エンターテインメントとアートの両方の要素を備えていると同時に、そうしたカテゴライズを拒絶してもいる複雑なシャブロル映画の世界を覗いてみよう。

映画祭ディレクターの映画祭りな日々

矢田部吉彦

毎年秋に開催されている東京国際映画祭にて、上映される作品を選んでいます。自分で海外に出かけて行ってかたっぱしから映画を見たり、公募に応じる形で世界中から送付されてくる数百枚のDVDと格闘したり、「御社がお持ちの作品を是非上映させて下さい」と映画会社に泣きついたり、ともかく常になんらかの形で映画を探す毎日です。

東京国際映画祭自体は九日間程度のイベントなのですが、そんなわけで残りの356日間も常に活動していることになります。銀行が三時に閉まるのに行員は三時に帰るわけじゃない、というのと似てるかな。いや、違うか。ちなみに僕は昔銀行に勤めていたのですが、三時に帰れていないなあとよく言われたものです、ホントに（実際は終電にも乗れない毎日でしたが）。

それはともかく、今年も映画祭は10月に無事開催されました。メインのコンペティション部門でグランプリを受賞したのが、カザフスタンの『トルパン』（セルゲイ・ドヴォルツェヴォイ、08）という作品。見渡す限りの地平線が広がる大ステップ地帯を背景に、大自然とともに生きる遊牧民家族の物語が圧倒的迫力の映像で描かれる作品です。

僕がこの作品に出会ったのが五月のカンヌ映画祭で、「ある視点」という部門に出品されていました。見ている最中にこれは素晴らしいと思い、上映終了とともに作品の権利を持つ会社のブース（カンヌ映画祭では世界中の映画会社が営業ブースを出店している）に飛び込み、東京での上映交渉を始めたのでした。

幸いに出品交渉も順調に進んで、東京での上映が実現し、そして最高賞のグランプリまで取ったということで、選んでいる僕としても非常に嬉しい展開となったのですが、では一般劇場公開はいつ？となるとこれがまだ決まっていないのです。映画祭で受賞しても劇場で公開されるとは限らないわけですね。これは、映画祭で主として芸術的評価を下す審査員と、マーケティングの視点から商業公開戦略を検討する映画会社との判断基準が異なるからで、仕方がないといえば仕方がない。が、僕としてはこのギャップを埋めるのが目標で、映画祭で高い評価を受けた作品がその後きちんと劇場で公開されるような流れを作っていかねばならんと思っています。映画祭が終わった後でも、縁があった作品にはとことん付き合って行きたいと思ってしまうのが映画祭ディレクターの性（さが）かもしれません。

ともかく『トルパン』、監督はドキュメンタリー出身の天才肌だし、そんな彼が四年間かけて撮影しただけあって驚異的な自然が描かれるし、普遍的な家族の絆が映画の底を支えているし、役者は野生の動物に負けないように徹底的に鍛えこまれているし、映画の奇跡に立ち会うような瞬間もあるし、本当に劇場公開される価値のある作品だと思うのですが、さてどうなるでしょうか……。『トルパン』というタイトルがこれからお耳馴染みになっていくかどうか、それとも日本では幻の名作で終わるのか、どうかご注目を！

『トルパン』

私はありとあらゆる映画を撮りました。完全な金儲け映画さえ撮ったのですが、そんな映画にも二、三の個人的要素を取り入れています。

——クロード・シャブロル

シャブロルのノワール（論）

吉田広明

一九五五年、批評家時代のシャブロルはカイエ・デュ・シネマ誌にスリラー＝ノワール論を発表している。以下にその論考の概要を紹介し、彼のノワール映画観が以後の自作映画にどのように反映していったのか、想像するきっかけとしたい。

『肉屋』©BRINTER

シャブロル、『肉屋』を語る

ドクトルX.の世界映画探訪 〜本邦未DVD化映画を巡る〜

映画の中のジャズ、ジャズの中の映画

上島春彦

第二回「アイル・ビー・シーイング・ユー」と『恋の十日間』

グリフィスの遺したもの

D・W・グリフィスは、天才と呼ぶに値するほど創造性豊かな唯一のアメリカ人監督である。

——ケヴィン・ブラウンロウ（映画史家）

安っぽくて下品な娯楽に、美と品格をもたらした最初の男がD・W・グリフィスだ。

——エリッヒ・フォン・シュトロハイム（映画監督・俳優）

映画と本の話

遠山純生

『若い娘』を取り巻く様々な才能

細川晋

第二回 映画人が選ぶ映画史上の傑作

クロード・シャブロル

映画雑感